



16



古文2

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

人のただ一言ただ一わざによりてその人のすべての善き悪きを定め言ふは漢書からかみの常なれども、これい^①と当たらぬことなり。すべて、善き人といへどもまれにはことわり②にかなはぬしわざも交じらざるにあらざ。あしき人といへども善きしわざも交じるものにて、生けるかぎり③のしわざ④ことごと⑤に善き悪き一方に定まれる人はをさをさ無きものなるを、いかでかただ一言一わざによりて定むべき。

人の生まれつきさまざまあるものなり。物の道理、事の利害など、すべてよろづのことを心にはよく思ひわきまへながら、口にはえ言はぬ人もあり。また、口にはよく言へども、しか行ふことはえせぬ人もあり。また、口にはえ言はねども、よく行ふ人もあり。また、口にはよく言へども、文にはえ書きいでぬ人もあり。また、口にはえ言はねども、文にはよく書きいづる人もあるなり。
(本居宣長「玉勝間」)
 *1 え言はぬ人〓うまく言えない人。「え」は後に否定の語を伴って、「〜できない」の意を表す。
 *2 しか〓そう。そのとおり。

問一 — 線①「いと当たらぬことなり」を現代語訳せよ。

問二 — 線②「ことわり」にかなはぬしわざ」の意味として最も適当なもの

- ア 本人の弁解しようもないような失敗。
 ナ 本人の弁解しようもないような失敗。
 ニ 本人の弁解しようもないような失敗。
 ホ 本人の弁解しようもないような失敗。
 ケ 本人の弁解しようもないような失敗。

イ 説明ができないような不思議な行動。

ウ ひとが断り切れないような無理難題。

エ 物の道理に合わないまちがった行為。

問三 — 線③「生けるかぎりのしわざ」の意味として最も適当なもの

ア あらゆる生きものの行い。

イ 晩年になつてからの行い。

ウ 一生の間のすべての行い。

エ 精一杯生きるための行い。

問四 — 線④「いかでか……定むべき」の意味として最も適当なもの

ア 一つの言葉や行動で、人の善し悪しは定められない。

イ 一つの言葉や行動にも、その人の人からは表れるものだ。

ウ 一つの言葉や行動にも注意をはらって生きなければならぬ。

エ 一つの言葉や行動では、定められた運命はわからない。

問五 後段に書かれていないものを次から選び、記号で答えよ。

ア 発言はしないが、よく実行する人もある。

イ 口は達者だが、実行がともなわない人もある。

ウ 口は達者だが、文章に書けない人もある。

エ 理屈は知っているが、発言できない人もある。

オ 口は下手だが、文章はたくみな人もある。

カ 発言はよくするが、理屈が通らない人もある。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

*1 魯州に母子貧しくして、世を渡るありけり。二人の子他行のひまに、隣りの人、母に恥ぢがましきことを与ふ。子帰て、このことを聞き、母が恥ぢをすすがむために、隣人を殺害しぬ。門を開きてささず、官に過を行はるべきよし申す。兄は、「母と弟とは過なし。我を誅せられむ。」と申す。弟は、「母と兄とは過なし。我を誅せられむ。」と申す。5 母を召して問はるれば、「二人の子は過なし。我がひがことによりて恥ぢがまし。我が子を教へざるゆゑなれば、我が身に過あり。二人の子を助けられむ。」と申す。「ともに申すところあれども、母を助けて、二人の子の中に一人を誅すべし。ただし、母が言葉によるべし。」とて、母に問はる。母申さく、「弟を召し取りて、兄をば助けらるべし。」と申す。王のたまはく、「人の親の子を思ふ習ひ、多くはいとときなきを愛す。何のゆゑに弟を捨つるぞ。」とのたまへば、母申さく、「弟は我が実子なり。兄は継子なり。兄が父命を終はりしとき、我が子のごとくはぐくむべしと申す。かの言葉忘れがたきゆゑに、兄を助けむと思ふ。我が子なれば、弟をばまゐらす。」と申すとき、王大きに感じて、「一門の中に三賢あり。一室の内に三義あり。」とて、二人ながら臣下に召しつかはれ、母も同じく富み榮えてけり。我が身を忘れて、我が身またし。情深く義ありて、賢人の名天下に聞こゆ。これを魯州の三賢といへり。

(無住『沙石集』)

- *1 魯州 中国の河南省魯山県。
- *2 他行 外出すること。
- *3 ささず 閉じないで。
- *4 誅せられむ 処罰なさってください。
- *5 まゐらす さし出します。
- *6 またし 全し。無事だ。安全だ。

問一 線①「過」とはどんな「過」か。現代語で書け。

問二 線②「申す」の主語を文中から書き抜け。

問三 線③「我が子を教へざるゆゑ」に、どうなったのか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 二人の息子を偽善者にしてしまった。
 - イ 息子に筋の通らないあだ討ちをさせた。
 - ウ 隣人の無礼にも我慢するしかなかった。
 - エ 親として果たすべき教育を怠ってきた。
- 問四 線④「いとときなき」にあたるのは、この場合だれか。文中から書き抜け。

問五 この文章で言おうとしたこととして最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 王たるものは、民衆の言い分をよく聞き分けて、正しい判断をしなければならぬ。
- イ 血のつながった肉親間の情愛だけが、いかなる危機・困難をも乗りこえさせるものである。
- ウ 法律に照らした型通りのやり方を捨てて、人間愛に基づく政治を行うべきである。
- エ 自分の欲を捨てて人のためを思う気持ちだが、かえって自分の身のためになる。

3 次の文章は、平清盛（ひらきよもり）に愛された祇王（ぎおう）という女性が、清盛の愛が別の女性にうつって、飽あきられ、捨てられて泣く泣く出て行く時の様子を書いたものである。これを読んで、あとの問いに答えよ。

祇王もとり思①ひ設②けたる道なれども、さすがに昨日今日とは思③ひ
よらず。急いぎ出いづべきよし、しきりにのたまふあひだ、はきのご④ひち
りひろはせ、みぐるしき物⑤どもとりしたためて、出いづべきにこそさだ
まり A。一樹⑥のかけにやどりあひ、同じ流れをむすぶ⑦だに、別れ
は悲あしきならひぞかし。B この三年があひだ住⑧みなれし所なれば、5
名残なごりも惜おしう悲あしくて、かひなきなみだぞこほれける。さてもあるべ
きことならねば、祇王すでに、いまはかうとて出でけるが、なからん
後の忘れ形見にもとや思⑨ひけむ、障子に泣く泣く一首の歌をぞ書きつ
ける。

⑤ もえ出いづるも枯かるるもおなじ野辺の草いづれかあ⑥きにあ⑦はではつ
べき

（『平家物語』）

*1 道 || 運命。

*2 さすがに || それでもやはり。

*3 むすぶ || (水を) 飲んで飲む。

問一 —— 線① 「思いひ設しけたる道」とは、どんな運命か。現代語で説
明せよ。

問二 —— 線② 「はきのごごひちりひろはせ」を現代かなづかいで書け。

問三 [A] にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、

記号で答えよ。

ア けり イ ける ウ けれ

問四 —— 線③ 「一樹のかけにやどりあひ、同じ流れをむすぶ」は、
人間どうしのどのような状態を表しているか。十五字以内で書け。

問五 [B] にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、

記号で答えよ。

ア また イ されども

ウ まして エ ただし

問六 —— 線④ 「さてもあるべきことならねば」は「いつまでもそう
してはられないので」という意味だが、「そう」の指す内容を現
代語で書け。

問七 —— 線⑤ 「もえ出いづる」、⑥ 「枯かるる」は、女のどんな状態を暗
示しているか。

⑤

⑥

問八 —— 線⑦ 「あき」は「秋」の意味だが、もう一つの意味がこめ
られている。その意味を書け。

4

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

七夕祭ることなまめかしけれ。^①やうやう夜寒になるほど、雁なきてくるころ、萩の下葉色づくほど、^②早稲田刈りほすなど、とりあつめる事は秋のみぞ多かる。また、野分の朝こそをかしけれ。言ひつづくれば、^③皆源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じ事、また今さらには言はじともあらず。^④おぼしき事言はぬは腹ふくるるわざなれば、^⑤筆にまかせつつあぢきなきすさびにて、^⑥かつ破り捨つべきものなれば、^⑦人の見るべきにもあらず。
 (兼好法師『徒然草』)

- *1 なまめかしけれ 優雅なものである。
- *2 早稲田 早く成熟する稲を植えた田。
- *3 ことふりにたれど 言い古されてしまっていることであるが。
- *4 おぼしき事 心に思っていること。
- *5 あぢきなきすさび 心につまらない慰め。

問一 線①「やうやう」を現代かなづかいで書け。

問二 線①③の言葉の意味をそれぞれ書け。

問三 線④「源氏物語・枕草子」の作者をそれぞれ漢字で書け。

源氏物語 枕草子

問四 線⑤「言はじともあらず」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 言うわけにはいかない。
- イ 言うつもりがあるわけでもない。
- ウ 言うまいというわけではない。
- エ 言おうとしても言うことがない。

問五 線⑥「腹ふくるる」の意味に近い語を次から選び、記号で答えよ。

- ア 不安
- イ 満足
- ウ 不快
- エ 安心

問六 線⑦「人の見るべきにもあらず」とあるが、何を「見るべきにもあらず」といつているのか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 七夕
- イ 秋
- ウ 源氏物語・枕草子
- エ 自分の書いているこの文章

問七 線⑦で筆者が言いたかった内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア だから七夕を祭るのは優雅なものなのだ。
- イ だから皆源氏物語・枕草子に書かれているのだ。
- ウ だから言いたいことはほとんどん言ったほうがいい。
- エ だから言い古されたことを書いてもかまわないのだ。

問八 秋という季節を筆者はどのようにとらえているか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 人にしみじみと情趣を感じさせる季節。
- イ 忙しい中にも実りの喜びがある季節。
- ウ 人の心を何かといらだたせる季節。
- エ 喜びと腹立たしさが生じる季節。

漢文・漢詩では、教科書で学んだ基礎的なことや特殊文字の働きをおさえて、内容をとらえよう。漢文・漢詩の読解の際、特にポイントとなるのは、以下のようなことである。

◇漢文 昔の中国の文章（日本でそれをまねたものも含む）。

○訓読

訓読とは、中国語で書かれたものを、意味がわかるように訳して読むこと。訓読の際に用いる記号を覚えて、内容を読み取るよう。

①返り点 漢字を読む順序を示す記号。

●レ点 一字だけ、上に返って読む。

●一・二点 二字以上、返って読む。

●上・下点 一・二点の部分をはさんで、上に返って読む。

⑥ ① ④ ② ③ ⑤

②送りがない 漢文を訓読するため補った助詞、用言の活用語尾などをいう。漢字の右下に、歴史的かなづかいを使い、かたかなでつける。 子曰ハク

③書き下し文 漢文を訓読したとおりに、漢字とかなで書いた文。

春眠曉を覚えず（春眠不覚曉）

○特殊文字

①再読文字 一度読んで、再び下から返って読む字。

未(打消) 人未還。 人いまだ還らず。

猶(比況) 過猶不及。 過ぎたるはなほ及ばざるがごとし。

②置き字 直接読まず、他の文字の送りがないで働きを表す。

於(比較) 苛政猛於暴虎。 苛政は暴虎よりも猛し。

而(順接) 学而時習之。 学びて時に之を習ふ。

◇漢詩 中国の古典の詩。リズムを重視し、短い言葉の中で感動を伝えていく。

○種類・構成

唐代以後の詩(近体詩)は定型詩で、主なものに、句数が四句の絶句、句数が八句の律詩がある。一句の字数が五字のものを五言、七字のものを七言といい、それぞれ五言絶句、七言絶句、五言律詩、七言律詩という。文章構成でよく「起承転結」はもとは漢詩の構成の型。絶句の場合、一句を起句、二句を承句、三句を転句、四句を結句という。起句は歌い起し、承句は起句を受けて筋を展開し、転句は流れを転じて変化をもたらし、結句は全体をしめくくる。

○表現技法

漢詩に独特な表現技法として次のようなものがある。

押韻：同じ音を句末に置き、リズムを整える。

对句：二つの句を対照的に対応させ、印象を強める。

静夜思 李白

牀前看月光

一句(起句)

「光」「霜」「郷」が韻

疑是地上霜

二句(承句)

をふんでいる(押韻)

举头望山月

三句(転句)

望山月

低头思故乡

四句(結句)

思故乡

五言

漢文・漢詩では、まずきまりを覚え、漢文・漢詩独特の言い回しに慣れることが大切である。



33



実力強化問題4

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

その子供には、実際、食事が苦痛だった。体内へ色、香り、味のあ
る塊なまを入れると、何か身みが汚れる気がした。空気のような食べ物はないかと思う。腹が減ると飢えは十分感じるのだが、うっかり食べる気はしなかった。床とこの間の冷たく透すき通った水晶すいしょうの置物に、舌を当てたり、頬ほおを付けたりした。飢えぬいて、頭の中が澄みきったまま、だんだん気が遠くなつて行く。それが谷地やちの池水を隔へだてて、丘おかの後ろへ入りかける夕陽ゆふひを眺ながめているときでもあると、子供はこのままのめり倒たおれて死んでも構まわないとさえ思う。だが、この場合はくぼんだ腹はらにきつく締めつけてある帯おびの間に両手を無理に差し込み、体は前のめりのまま首だけ仰あおのいて、

「お母さん。」

と呼ぶ。子供の呼んだのは、現在の生みの母のことではなかった。子供は現在の生みの母は家族中でいちばん好きである。けれども子供には、まだほかに自分に「お母さん」と呼ばれる女性があつて、どこかにいそうな気がした。自分がいま呼んで、もし「はい」と言つてその15
女性が目の前に出て来たなら、自分はびっくりして気絶してしまふに
ちがいないと思う。しかし、呼ぶことだけは悲しい楽しさだった。

「お母さん。お母さん。」

薄紙うすかみが風に震ふるえるような声が続いた。

「はい。」

と返事をして現在の生みの母親が出て来た。

「おや、この子は、こんな所で、どうしたのよ。」

は かた 顔をゆすつて顔をのぞき込む。子供は勘違いした母親に対して何だか恥はずかしく、赤くなつた。

「だから、三度三度ちゃんとご飯食べておくれと言うのに。さ、ほん25
とに後生だから。」

母親はおろおろの声である。こういう心配のあげく、卵と浅草海苔あさのりがこの子のいちばん性に合う食べ物だということが見出されたのだつた。これなら子供には腹に重苦しいだけで、汚みされざるものを感じた。

子供はまた、ときどきせつない感情が、体のどこからかわからない30
で体いっばいに詰つままるのを感じる。そのときは、酸味のある柔やわらかいものなら何でも嚙かんだ。生梅や橘たちばなの実をもちで来て嚙かんだ。さみだれの季節になると、子供は都会の中の丘と谷あいやいにそれらの実の在所を、それらをついばみに来る **A** よく知っていた。

子供は、小学校はよく出来た。一度読んだり聞いたりしたものは、35
すぐわかつて乾板*1かんばんのように脳のひだに焼きつけた。子供には学課の容易やすさがつまらなかつた。つまらないという冷淡れいたんさが、かえつて学課の出来をよくした。

家の中でも学校でも、みんなはこの子供を別物扱いべつぶつあひにした。

父親と母親とが一室で言い争つていた末、母親は子供のところへ来40
て、しみじみとした調子で言った。

「ねえ、おまえがあんまりやせていくもんだから学校の先生たちの間
で、あれは家庭で健康の注意が足りないからだという話はなしが持ち上がったんだよ。それを聞いて来てお父さんは、ああいう性分しやうぶんだもんだから、
わたしに意地悪く当たりなさるんだよ。」

20

10

そこで母親は、畳の上に手をついて、子供に向かつてこっくりと頭を下げた。

「どうか頼むから、もっと食べるものを食べて、太っておくれ。そうしてくれないと、わたしは朝晩、いたたまれない気がするから。」

子供は自分の異常な性質から、いずれは犯すであろうと予感した罪悪感を犯した気がした。わるい。母に手をつかせ、おじぎをさせてしまったのだ。頭がかつとなって体に震えが来た。だが不思議にも心はかえって安らかだった。すでに自分は、こんな不孝をして悪人となつてしまった。こんなやつなら、自分は滅びてしまつても自分で惜しいとも思ふまい。よし、何でも食べてみよう。食べ慣れないものを食べて体が震え、吐いたりもどしたり、その上、体中が濁り腐って死んでしまつてもよいとしよう。生きていて始終食べ物の好き嫌いをし、人をも自分をも悩ませるよりその方がましではあるまいか——。

子供は、平気を装つて家のものと同じ食事をした。すぐ吐いた。口中や咽喉を極力無感覚に制御したつもりだが嘔み下した喰べものが、母親以外の女の手が触れたものと思う途端に、胃囊が不意に逆に絞り上げられた——女中の裾から出る剥げた赤いゆもじや飯炊き婆さんの横顔になぞつてある黒髪つけの印象が胸の中を「B」搔き廻した。

兄と姉はいやな顔をした。父親は、子供を横眼でちらりと見たまま、知らん顔して晩酌の盃を傾けていた。母親は子供の吐きものを始末しながら、恨めしそうに父親の顔を見て、

③「それご覧なさい。あたしのせいばかりではないでしょう。この子はこういう性分です」

と嘆息した。しかし、父親に対して母親はなお、おずおずはしていた。

その翌日であった。母親は青葉の映りの濃く射す縁側へ新しい莫座敷を敷き、組板だの庖丁だの水桶だの蠅帳だの持ち出した。それもみな

買い立ての真新しいものだった。

母親は、自分と組板を距てた向こう側に子供を坐らせた。子供の前には膳の上に一つの皿を置いた。

母親は、腕捲りして、薔薇いろの掌を差し出して手品師のように、手の裏表を返して子供に見せた。それからその手を言葉と共に調子づけて擦りながら云つた。

④「よくご覧、使う道具は、みんな新しいものだよ。それから拵える人は、おまえさんの母さんだよ。手はこんなにもよくきれいに洗つてあるよ。判つたかい。判つたら、さ、そこで——」

母親は、鉢の中で炊きさました飯に酢を混ぜた。母親も子供もこんな噎せた。それから母親はその鉢を傍らに寄せて、中からいくらかの飯の分量を掴み出して、両手で小さく長方形に握つた。

蠅帳の中には、すでに鯨の具が調理されてあつた。母親は素早くその中からひとときれを取り出してそれからちよつと押さえて、長方形に握つた飯の上へ載せた。子供の前の膳の上の皿へ置いた。玉子焼鯨だった。「ほら、鯨だよ、おすしだよ。手々で、じかに掴んで喰べても好いのだよ」

子供は、その通りにした。はだかの肌をするする撫でられるようなころ合いの酸味に、飯と、玉子のあまみがほろほろに交つたあじわいが丁度舌一ぱいに乗った具合——それをひとつ喰べてしまつと体を母に抛りつきたいほど、おいしさと、親しさが、ぬくめた香湯のように子供の身うちに湧いた。

子供はおいしいと云うのが、きまり悪いので、ただ、にいつと笑つて、母の顔を見上げた。

「そら、もひとつ、いいかね」

母親は、また手品師のように、手をうら返しにして見せた後、飯を

握り、蠅帳から具の一片れを取りだして押しつけ、子供の皿に置いた。子供は今度は握った飯の上に乗った白く長方形の切片を気味悪く覗いた。すると母親は怖くない程度の威丈高になって、

「何でもありません。白い玉子焼きだと思って喰べればいいんです」といった。

かくて、子供は、烏賊というものを生まれて始めて喰べた。滑らかさがあった、生餅より、よっぽど歯切れがよかった。子供は烏賊鮭を喰べていたその冒険のさなか、詰めていた息のようなものを、はっ、として顔の力を解いた。うまかったことは、笑い顔でしか現さなかった。

母親は、こんどは、飯の上に、白い透きとおる切片をつけて出した。子供は、それを取って口へ持って行くときに、脅かされるのにおいに掠められたが、鼻を詰まらせて、思い切って口の中へ入れた。

白く透き通る切片は、咀嚼のために、上品なうま味に衝きくずされ、程よい滋味の圧感に混じって、子供の細い咽喉へ通って行った。

「今のは、たしかに、ほんとうの魚に違いない。自分は、魚が喰べられたのだ——」

そう気づくと、子供は、はじめて、生きているものを噛み殺したよいうな征服と新鮮を感じ、あたりを広く見廻したい欲びを感じた。むずむずする両方の脇腹を、同じような欲びで、じっとしていられない手の指で掴み搔いた。

「ひ、ひ、ひ、ひ、ひ」

無暗に疝高に子供は笑った。母親は、勝利は自分のものだとしてと見ると、指についた飯粒を、ひとつひとつ払い落としたりしてから、わざと落ちついて蠅帳のなかを子供に見せぬよう覗いて云った。

「さあ、こんどは、何にしようかね……はてね……まだあるかしらん

……」子供は焦立って絶叫する。

「すし！ すし！」

母親は、嬉しいのをぐっと堪える少し呆けたような——それは子供が、母としては一ばん好きな表情で、生涯忘れ得ない美しい顔をして、「では、お客さまのお好みによりまして、次を差し上げます」

最初のときのように、薔薇いろの手を子供の目の前に近づけ、母はまたも手品師のように裏と表を返して見せてから鮭を握り出した。同ような白い身の魚の鮭が握り出された。

母親はまず最初の試みに注意深く色と生臭の無い魚肉を選んだらしい。それは鯛と比良目であった。

子供は続けて喰べた。母親が握って皿の上に置くのと、子供が掴み取る手と、競争するようになった。その熱中が、母と子を何も考えず、意識しない一つの気持ちの痺れた世界に牽き入れた。五つ六つの鮭が握られて、掴み取られて、喰べられる——その運びに面白く調子がついて来た。美人の母親の握る鮭は、いちいち大きさが違っていて、形も不細工だった。鮭は、皿の上に、ころりと倒れて、載せた具を傍らへ落とすものもあつた。子供は、そういうものへ却って愛感を覚え、自分で形を調べて喰べると余計おいしい気がした。子供は、ふと、日頃、内しよで呼んでいるも一人の幻想のなかの母といま目の前に鮭を握っている母とが眼の感覚だけか頭の中でか、一致しかけ一重の姿に紛れている気がした。

(岡本かの子「鮭」)

* 1 乾板 || フィルムの役目をする、ガラス板などに薬品を塗ったもの。

* 2 ゆもじ || 女性の腰巻。

* 3 黒鬢つけ || 日本髪用の整髪油。

* 4 蠅帳 || 食品の上にかぶせてハエのたかるのを防ぐ傘状の道具。

問一 — 線①「勘違いした母親」とあるが、母親は何をどのように勘違いしたのか書け。

問二 — 線②「A、B、Cにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えよ。」

- ア からのように
- イ 獣けもののように
- ウ 象牙ぞうげのような
- エ 暴力のように
- オ もぎたての果実のような

_____ A _____ B _____ C _____

問三 — 線③「いずれは犯すであろうと予感した罪悪」とはどのようなことか。文中から二字で書き抜け。

問四 — 線④「それご覧なさい。あたしのせいばかりではないですよ」というのは、だれがどんなことを母親に言ったことに対する言葉か書け。

_____ だれ _____

どんなこと

問五 — 線⑤「よくご覧、……洗ってあるよ」と子供に言ったのはなぜか。それがわかる一文を文中から探し、初めと終わりの五字を書き抜け。

問六 — 線⑥「わざと落ちついて蠅帳のなかに子供に見せぬよう覗いて」とあるが、なぜ母親はそんなふうにするまったのか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 蠅帳のなかに魚を子供が見ると、ふたたび子供が気味悪さを感じ、鰯を食べなくなると思ったから。
- イ 子供が鰯を食べてくれたのはうれしいが、その喜びを表に出すと、子供の気持ちが変わってしまうような気がしたから。
- ウ 子供が鰯を好いてくれたようなので、わざとじらせて、鰯に対する欲求を高めようと考えたから。
- エ 子供が鰯を食べすぎて吐きだすと困るので、少し間をおいて、食べさせようとしたから。

問七 — 線⑦「内しよで呼んでいるも一人の幻想のなかの母と……紛れている気がした」はどのようなことを表現していると思われるか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 心の中でしか呼びかけることができなかつた母親が、直接呼びかけることができるくらい身近な存在として意識できるようになったということ。
- イ 眼前の母親が、自分の心の中で思い描いていた実の母親に近づいていくように感じられたということ。
- ウ 現在の母親が、自分が心の中で恋慕こぼい続けてきた理想の母親と同じに感じられるようになったということ。
- エ 自らの手で鰯を握ってくれる母親は、心に想像していた通り、自分を理解し偏食へんじきを直してくれる母親であったことに気がついたということ。
